

---

# 敢えて言うなら.....

紀乃子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

敢えて言うなら……

### 【Nコード】

N2098D

### 【作者名】

紀乃子

### 【あらすじ】

これは、俺様が一人称の柴又君と腹黒いのか純粹なのか分からない多賀野君のお話です。

## 柴又君篇（前書き）

BLの一步手前を目指してるので、苦手な方は辞めたほうがいいかもです。

## 柴又君篇

ふう。俺様も、ようやく卒業単位が採れたぜい……。

長かった、嫌ほんとーに。だって、三年掛かってんだから。

「おい、柴又<sup>しばまた</sup>。ようやく卒業だって？」

柴又つていうのは、俺様の名前だ。あっちから馬鹿みたいな声を出しながら、両手をブンブン振り回して近寄ってくるヤツは多賀野<sup>たがの</sup>。多賀野は、悔しいことに大学院まで進んでいる。

いつも単位試験の直前に限って、麻雀に誘うこの悪魔！

「今回ばかりは、お前の負けだな。多賀野。いくら邪魔しようつたって、三年目にはもう試験の妨害対策してんだよ！」

多賀野は、俺の頭をグリグリ撫で回しながら（やめろ！！）、にこやかに微笑んでいる。

「やだなー、柴又つてば。被害妄想じゃない？」

「……っ！被害妄想だと！お前、被害妄想って言葉知ってて使ってるのか！？試験直前に限って麻雀に駆り出されるわ、違う会場に連れてかれるわ、俺の財布パクるは！財布には、学生証が入ってるの知っててしただろ！」

そうなのだ。多賀野のヤツは、試験直前になるやいなや、それまでは全く出向かないクセして後輩の院生の麻雀部屋に入り浸り、試験が終わるその日まで何だかんだで俺様を連れ回すんだ。

俺様は、逃げようとしたぞ！ただ、ちよつと身長が多賀野より低くて（俺様は172cmだ……）、体重も軽いがためになかなか力づくで逃げ出すことが出来ないんだ！

当日になったらなつたで、連日の睡眠不足からくる意識朦朧な俺様を「こつちが試験会場だつてー」と、嘘っぱちの教室に連れ込み「頑張るんだよ！応援してる」って言葉とともに置き去りにして走り去っていくし！（……俺様は、方向音痴だからな）

去年なんか、財布をパクられて学生証の再発行して貰ってる間に

遅刻で立ち入り禁止にされたし。（あのクソ事務員め！なにが再発行用紙がないだー！）

……そりゃあ、俺様も最初の年は偶然だって信じたさ。何だかんだで、ヤツは親友だからな。

でも、人間として間違ってるだろ！年間いくら払ってると思ってるんだ！

俺様が、息を切らしていると、

「はい、お茶」

と、ナイスタイミングでペットボトルのお茶を渡された。

「ん」

ゴクゴクゴクゴク……。

「でも、妨害対策って具体的に何したのか知りたいなあ」

ヤツは、院まで行ってるだけあって知りたがりやなんだ。

そこで、俺様はペットボトルを口から離して言っっちゃった。

「……ふは。ようやく認める気になったか？」

「なにが？」

まだしらを切る気か？

「お前がして来た数々の妨害工作」

多賀野の目はまだ細っこいまままだ。俺様はご立腹なんだからな。ここらで認めて、とつとと謝れ。

「んー、僕にはそんな意図は無かったんだけど。さっきの話を聞いてると、結果的にそうだったかもしれないね。ごめんね」

ヤツは、考えた後にちよつと悪かったなっ顔をした。

そして、頭を下げた。

まあ、頭を下げた以上は俺様も男だ。許してやろう。

「ん。許してやるよ」

この一言は、案外すんなり出てきた。やっぱり、多賀野とは親友だからな。

しかし、当的多賀野はこっちがビビるくらい瞬時に、今さっきまでの『ちよつと悪かったなの顔』をポイツと捨てて、また目を細っ

こくさせて聞いてきた。

「んで、どうゆう対策したの？」

さっきの顔は嘘か？

ってか、あくまでもそこに拘るんだな。

でもまあ、もう卒業だつて出来るし。……教えたところで支障は無いだろう。うん。来年は無いんだしな！

「まあ、お前も謝ったからな」

ヤツの細っこい目の奥が笑って無い気がして、ちょっとビビるが。実は、教授に頼んどいたんだ。当日じゃなくて、一月前にして下さいって。そしたら、口答試験だよって言うからさ。ほら、一月前ぐらいにお前がちよつとバタバタしてた時期があつただろ？あの時、俺の試験日が重なってさ。寮の部屋が一緒だからどうしようかとも思ってたんだけど、なんとか上手くいけて良かったよな。……そういうや、あのゴタゴタって何だったんだ？」

俺様は、だんだんと多賀野の目だけじゃなくて雰囲気もヤバくなつてくようで、話を変え、かつ俺様も気になる事を聞いてみた。

「あー、あれね。あれは、単に院の試験があっただけ。……っていうか、佐々木教授だったんだね。ふうん」

多賀野は、一応まだ目を細っこくさせてはいたが、いつもより一段低い声だった。

お、怒ってんのか？何でだ？？

ハッ、そういえばコイツには変な噂があつた。

多賀野は、身長190cmあってモデルみたいな体型をしてる。

顔は、この頃流行りの女の子受けしそうな甘い感じだ。その上、なにがあっても笑顔を絶さない（なんか、アイドルみたいだな……）

まあ、そんな多賀野はやっぱり女の子に人気で男にやつかみを受けやすかった。

確か……、去年辺りに多賀野にちよつかいを掛けたヤツがいて、俺様にまで余波がきたんで撃退した事があつたんだ。

そしたらソイツには、それから小さな不幸が積み重なって失意の

内に大学を去って行ったって話だったんだが、その小さな不幸は多賀野がもたらしたとか何とか……（もしや、本当に悪魔と契約してるとかの訳ないよな……）

ハッ！つてことは、教授が危ない！？

「お、おい多賀野。まさかとは思うが、教授に何かするつもりじゃないよな？」

一応確認が大切です。

「何言ってるのかなー、柴又つてば。僕に何が出来るって言うのさ」「いやいやいや、お前ならなんとかしちやいそくだぞ。っていうか、その笑顔をやめろ。」

「……、そくだよな。何もしないよな？」

そくだ、子羊な俺様は信じたいことだけ信じるんだ。ってか、信じたいんだ！信じさせる！！

「そくだよ。一介の院生にどうこう出来るはずないでしょ。……、もうお昼食べた？」

俺様は、子羊なんだー！！

「いや、今から。食いに行くか？」

「そくだね、今日は鰯大根があるって。柴又、好きだったよね」「大好きだ。」

「ん。まあな」

なんだかんだ言いつつ、もう今年でこの学校を卒業かと思うと怪しいものだ。隣りで歩くコイツとも、離れるんだなーとか感慨に耽ってみたり。

あー！！俺様らしくない。

ともかく、そんなことは鰯大根を食ってからまた考えてみたらいいんだ。よし。食うぞ。

「柴又ー？」

いつの間にか、足が止まっていたらしく多賀野と距離があいてい

た。

「今行く」

俺様は一步踏み出した。

『貴方の隣りに立つ人物は、どんな存在ですか？』

ヤツが、道端で雑誌の写真を撮られていた時に何故か俺様にまでインタビューしてきた時の質問だ。

その時の俺様の答えは、『知り合い』だったが（ヤツは悲壮な顔をしていた）今また同じ質問をされたら、こう言っだろう。

『敢えて言うなら、……やっぱ知り合い』

誰がそんなこっぴどかしい事が言えるもんか。どうしても言うのなら、ヤツが隣りで寝てる時だけ部屋の隅っこでちっちゃく言っ  
てやるんだ。

『親友』って。

……あー！！痒いー！！



## 柴又君篇（後書き）

一回この作品を削除してしまって、ご迷惑をお掛けしました。連載に  
したかったので、こうさせて頂いたきました。これからも、宜しく  
お願いします。

多賀野君篇（前書き）

柴又君よりB Lよりかも知れない……。

## 多賀野君篇

僕と寮が同室の、卒業浪人三年目の柴又しばまたがとうとう卒業する事になった。

僕は、柴又の親友の多賀野たがの。

現在は、大学の院に在籍している。

僕は柴又が好きだ。もちろん友情だが……。

この頃勘違いされて、少し愉快な事になってるんだが柴又は気付いてないだろうな。

そこがまた好きな所なんだけど。

この三年間、柴又が卒業出来ないように単位を取らせまいとあらゆる事をして来た。

柴又が大学四年の時は、確か僕自身も四年だったけど取り敢えず麻雀をさせたつけ。柴又ってなかなか弱くて……どうやって勝たせるか悩んだな。あー懐かしい。

今もだけど、柴又って肌が白くてどっちかっていうと女顔をしてるんだよね。

そのせいか、男も女もお近付きになろうとするんだ。迷惑な話だよ。

柴又は、外見はもちろんだけど中身が面白いのに。

まあ、誰にも教えてやるつもりはないけど。

それに、なかなか俺様な一人称のせいか近寄っては来ないし。もし来たとしても、近付けさせはしないけどね。

話を戻そう。

柴又が卒業浪人の一年目には、方向音痴な彼を引きずって全く違うキャンパスに連れて行き、そのまま置いてけぼりにしたから結局次の日になって部屋に帰って来たな。

あの時は、僕に怒ろうとしながら疲労に負けて沈没してたっけ。卒業浪人二年目には、院の後輩の部屋で麻雀させて、ビールを買ってくるとか適当なこと言って柴又の財布をガメて来たんだっけ？でも、やっぱり心配になって事務員の手伝いをしながら再発行用紙を抜き取って、全く違う場所に移して置いたんだ。

いや、アレは正解だったな。柴又ったら、遅刻で入れなかったって言ってたし。

そして今年三年目は、僕も修士課程が終わるから卒業後の事を心配して、あちこち奔走してたんだよね。

もちろん就職の事なんかじゃない。

柴又と卒業した後もお付き合いするための工作さ。

だから、今年は柴又を卒業させてあげるつもりは端からあったんだ。

でも、もしまた浪人しちゃったら完璧な計画を遂行することが出来ただけだ。

まあ、贅沢を言うつもりはないよ。七、八割の出来だし。

そういえば、柴又は自分で僕の妨害工作を回避したことに浮かれて気付いてないみたいだけど、本来の試験日近くには麻雀は完徹させたけど後は何もしてないんだよね。

完徹ぐらいだったら受かるでしょ。正確には、四回も同じ勉強してるんだし。

ってな事を言ったら、また憤慨するんだろうな。．．．．飽きないヤツだ。

今、柴又は目の前でこちらをジロジロと見ている。さっき、教授の話の聞く前に軽く『ちよつと悪かったなって顔』を造って謝ったんだけど、やっぱりすぐに外したのがいけなかったかな？

でも、それにしてはちよつと怯えた目．．．．。

佐々木教授の名前を出して、意味深に独り言を言ったことにビビったのかな？

何を考えてるんだか．．．．。大概予想はついたよ。

っていつか、何時までもそんなでいたら頭からガブツと喰っちゃまうぞ？

多少本気なんだけど。

と、いきなりハツと気付いたような顔をした柴又が、

「お、おい多賀野。まさかとは思うが、教授に何かするつもりじゃないよな？」

とかっていうふざけた事を言ってきた。

元から、あんなじいさんを苛めて楽しむ趣味は持ち合わせていないが、多少の不幸は味わって貰いたいなとも考えていた。

なんたつて、柴又が浪人して落ち込む姿を見れる可能性を僕以外の人間が減らしちゃったんだからね。

でも、簡単にしないよって言うてしまうのも楽しくないな。．．．ふむ。

「何言ってるのかなー、柴又つてば。僕に何が出来ると言うのさ」  
親友の僕を信じようと葛藤してるなあ。

「……、そうだよな。何もしいよな？」  
信じるには信じるが、一応確認ですか？

いいいいいよ、そんなに心配するなら何もしないよ。……柴又が卒業するまではね。

「そうだよ。一介の院生にどうこう出来るはずないでしょ」  
そういえば、今日の定食に鰯大根って載ってたな。柴又が大好きな。

「もうお昼食べた？」

食べてる訳ないよね。いつも一緒に食べるんだから。案の定、  
「いや、今から。食いに行くか？」

「そうだね、今日は鰯大根があるって。柴又、好きだったよね」  
大好きだったよね？

「ん。まあな」

今こうして、柴又と学校生活を送れるのもあとちょっとか。

なんだか、感慨深いな。

とはいえ、柴又は卒業後のための就活をしてる訳ないから、その世話をしてあげて。……結局のところ、これまでと全く変わらないんだよね。

柴又はまだ気付いてないだろうなあ……逃がしはしないけど。

あつ、隣りに柴又がない。後ろで立ち止まって、何か考えてるなあ。

「柴又ー？」

こつちを見た目が、少し潤んでた。柴又は、大学を出たら僕と離れるって思ってるんだろうな。

まあ、卒業式を楽しみにしときなよ。お祝いは、就職先とマンシヨンの鍵だから。

柴又は、きつとヤな顔をするだろうね。でも、いいんだ。照れ隠しだって知ってるからね。

「今行く」

柴又が、僕の方に一步踏み出した。

『貴方の隣りに立つ人物は、どんな存在ですか？』

柴又と、自炊のための買い出しに出掛けた休日に、雑誌の写真を撮らせて欲しいと言われた事があった。

僕が写真を撮られていた間、暇そうにしてた柴又到インタビューしていた。その時の質問だ。

柴又は、ちよつと考えて「知り合い」なんて言葉で終わらせちゃったんだった。

僕は予想通りだなあとは思ったものの、『悲壮な顔』を被ってみたんだよね。

そしたら、柴又つてば罰が悪そうにしてたな。

今また同じ質問を柴又到にしたとしたら、なんて答えるだろうね。

……きつとまた「知り合い」だろうな。  
なんて言っても、彼は照れ屋だし。

もし僕が同じ質問をされたら、きつと

「柴又のことは言葉に変えたり出来ないんだけど、敢えて言うなら……愛情の塊だね」

って、言うな。なんたって、柴又の分まで言うんだから。

そうして、柴又にやな顔されながら白髪になっても一緒にいるんだよ。

ふふふ、幸せだなあ。

## 多賀野君篇（後書き）

多賀野君は、腹黒いのか純粹すぎるのか分かんないキャラでした。  
次は、柴又君と多賀野君の過去話にしたいです。



## 出会い篇 1（前書き）

敢えて言うなら……の、柴又君と多賀野君の出会い篇です。

## 出会い篇 1

柴又<sup>しばまた</sup>は歩いてきた。

この建物は今時珍しい木造建築で、柴又が此所まで歩いて来るあいだギシギシと悲鳴を上げ続けている年季物である。

春とはいってもまだ肌寒いこの時期、寒がりな冷え症の柴又は不安だった。

なぜなら、こうして立つて居るだけで何処からか冷気が流れ込んでいて、彼の吐息を白く染め上げていたからである。

ギシッ。……ギシッ。

ようやく目指していた部屋の前だ。

寒さでだいぶ、手がかじかんでいる。

ふと、窓の外を見た。四月は、何処となく浮かれた雰囲気がつている気がする。

学校と呼ばれる場所は特にその傾向が強いなと思った。

柴又は、今年無事に大学二回生になった。進級出来たのである。しかし、事ここに至つてとある問題が彼に降り懸かった。

それは、人間の基本とも言つべき衣食住の内の『住』に関する問題だった。

全ては今年の三月に始まった。

柴又の父親が海外赴任に決まったのだ、めでたい事に。

最初は、柴又も喜んでいて、淋しくはなるが、昇進へのステップだと。

しかし、そこで問題が発生したのだ……柴又にとっては。

それは、父親の海外赴任に母親も同行するに当たって、柴又が何処に住むかという事だった。

柴又は、それまで実家から大学まで通っていた。

それが、その実家であつた社屋を出る為に柴又が住める家が無く

なるという事なのだ。

そこで、両親は柴又に選択肢を二つ与えてきた。

一つ目は、兄夫婦の住むアパートに住む。

二つ目は、寮に住む。

何故、一人暮らしの選択がないのかと尋ねたところ、そんな金は無いと言う簡潔な答えだった。

そこで、柴又はよく考えた。

しかし、すぐに結論が出る 寮という。

何故なら、兄夫婦には既に三人姪や甥が生まれていたからだ。

だから今、柴又はこれから住むことになる部屋へ入ろうとしているのだが、ふと桜が目に入り「俺様、大丈夫かな……」なんて、ちよつと彼には似合わない独白をしていたのである。

その時だった 隣の部屋のドアがまるで蹴破る様にして開いたのは。そして、それに続く様にして二人の男が飛び出て来た。

一人は眼鏡を掛けた長身の男で、もう一人は髪を金色に染めた小太りの男だった。

そんな二人が共通していたのは、半泣きの状態だったことぐらいだろう。

その二人は、くると部屋に対するように身体を向けるとブンツと音がしそなくらいの勢いで、身体を90度に曲げた。

そして、眼鏡が先に発言。かなり大きな声だから、寮中に聞こえるんじゃないかってぐらい……

「ホントにすみませんっ。俺達が悪いんですっ。俺達ならなんて、思い上がって食券一年分に釣られて引き受けちゃったのがいけないっただんですっ」

と、今度は金髪が激しく首を縦に振りながら、負けず劣らずの音量で、

「そうなんですっ。思い上がってたんですっ。寮長には、きちんとこっちに非があるって説明して新しい住人入れるようにしますから

っ。失礼しますっ」

と、これまた叫ぶように言ってから二人は頭を下げたままで、柴又に気付きもせずに全力で走り去って行った。

「あの勢いでも、廊下の床板は抜けないんだな」

柴又は、思わず口にしていた。

そして、二人組の後ろ姿からまた隣りの部屋に視線を戻すと、まだ扉が開け放たれたままだ。

これだけの騒ぎなのに、誰も出て来ないのも不思議だった。どういうことだ？

昔から好奇心が強かった柴又は未だに部屋にいる人物に興味が出てきた。

あんな事言われてたけど、言われてたヤツってどんなヤツなんかな？……………扉が開きっぱなしだしな。……………親切な俺様は、閉めてやるんだ。うん。んで、たまたま中が見えちゃって、たまたまどんなヤツが見えてもそれは不可抗力だろう。……………よしっ。

柴又は 好奇心猫を殺す という言葉を知らなかった。

そろりそろりと近付いて行く。足元でギシッと音がするが大丈夫だろう。

あと一歩で、扉の把手に触れる。

……………いっ……………ぽ。よし着いた。

と、柴又が息を吐いた時にヌツと中から人が出てきた。足音もしなかったから、柴又は一瞬頭が真っ白になり次の反応が遅れた。

なんとヌツと現われた人物は、扉の前に固まっている柴又を寸の間じつと見た瞬間、いきなり柴又のほっぺたを摘んで両側に引っ張ってきたのだ。

一瞬遅れたあと、

「んなっ……………！」

と柴又は反応した。

が、頬が横に引っ張られている為にはっきりとした発音にならない。

バシツと右手で払い除けて今度はきちんと、

「何するんだよっ！」

とはつきり言っちゃった。

柴又の眉は中央に寄ったままのしかめ面なままだった。

本当に何をするんだ、こいつは。初対面の人間に対して失礼じゃないか。

ますます眉は寄っていつていつている、と自覚していた。

そんな柴又に失礼なその男は、

「……だってマネキンじゃないかと思っただよ。人間だったんだね」

なんて、もつと失礼な事を言い出した。

柴又は扉の前に立ち尽くしていた事を思い出して、少しバツの悪い思いをした。

しかし、これは言っておかなければ。

「だからって、頬を引っ張るなよな。第一、こんなところにマネキンがある訳無いだろう」

痛かったんだぞ。それに常識で考えろよな。

柴又は言いたい事は、はっきり言っておく、という性格だった。すると、男は何が嬉しいのかニコニコと目を細めながら、

「うん、ごめんね。ところで君、初めて見る顔だけど今日から寮に入るコ？名前は？」

と謝ってきた。

謝ってきた直後は、柴又の眉が寄っていたのも離れたのだが。

謝った後に自己紹介もなにもなく勢い込んで柴又に質問してきた時には、少し気圧されてしまった。

しかし、それと同時にムツとした。

質問はいいんだよ。けどな、その前に自分の名前を名乗るのが礼儀ってもんだろっよ、と。

こう思いながら、柴又は目の前の人物を頭の先から足元までざっと見てみた。

身長は、だいたい180cmぐらいだろう。顔は、この頃流行りのふにやけた感じた。全体的にバランスがとれた身体で、モデルだと言われても納得出来るものだった。

ただ、さっきの二人組にあんな事を言われながら逃げられるような人物には見えない。

いや、さっきの行動は変だけどな。言ってる事も。でも、まだ許容範囲だろう。

柴又は、質問には答えずに逆に質問してやることにした。

偉そうに腕組みをしながら。

「人に聞く前にまずは自分が名乗れよ。あんたこそ誰なんだ？」

彼はそんな柴又をやはり目を細めて見ながら（だから、何がそんなに嬉しいんだ？）口を開いて、

「……確かにそうだね。僕は、多賀野<sup>たがの</sup>。今年二回生になった、この寮に住んで二年目の住人だよ。趣味は、寝ること。特技は、何処でも寝る事が出来ること。さっき見てたみたいだけど、あの人は元同室者。さっきまでは、同室者だったんだけど出て行っちゃったから。どっちとも、今年四回生の人達だよ。……、あとは何が自己紹介になるかな？何が知りたい？」

と言ってきた。

まさか、そんな事を聞いてくるとは思っていなかった柴又は少し悩んだが、取り敢えずさっきまで聞きたいと思っていた事を聞いてみる事にした。

「んじゃ聞くけど、さっきあの人達が出て行ったのってなんでだったんだ？」

多賀野と名乗ったその人物は、なんだそのことかといった顔をしないで、

「やっぱり見てたんだね。あれは、僕の癖が悪いから出て行ったらいいんだよね。詳しくは教えてくれなかったけど、自分が分からなくなるとか言いながら泣き出すんだ。僕の方が訳分かんないんだけど……。という訳だから、僕自身も実はよく分かってないんだよね。」

で、ついでに言うとな僕の同室者が変わったのはこれで11組目なんだよ。だから、寮長が部屋が余ってる訳でもないからって言って褒賞に食券を提供したんだけど、これでも長続きしなくてね。……んで、質問はこれくらい？」

多賀野は、小首を傾げながらそう聞いてきた。

軽く聞いてても、多賀野には何かあるだろうと考えさせられるような話だ。

しかし、その時柴又は違うことを考えていた。

小首を傾げるって行為は男がやっても可愛くないな……と。そう思いながら、無意識に柴又は頷いていたらしい。

「じゃあ、今度はそっちの自己紹介」

コイツ目が細いなんて思わせるくらい笑顔でそう言ってきたので、柴又はハッと我にかえって、さっき聞いた多賀野の自己紹介を思い出しながら口を開いた。

「俺様は、柴又。今年二回生になった、隣室に住む新しい住人だ。えっと……、趣味は風呂。特技は、銭湯探し。あと、好きなものはご飯で、嫌いなものは特にない。それくらいか？なんか聞きたいか？」

多賀野にも確認されたのだから、こっちも聞いとかないとフェアじゃないよな？

すると多賀野はチラリと隣室を見つめた後、もう一度視線を柴又に向けてこくと頷きながら、

「寮長のところにはもう行った？」

と、聞いてきた。

予想していた質問とは違ったので、ちょっと拍子抜けした。取り敢えず、質問には答えなきゃな。

「いや。寮長のところには、荷物を置いてから行くつもりだったんだ」

柴又は首を横に振りながらその旨を伝えた。

すると、多賀野は未だに開けっ放しだった扉を閉めて、

「先ずは寮長のところに行かない事には正式に寮で生活は出来ないんだよ。僕も用事があるし、連れて行ってあげるよ」

そんなことはいい、と言ってしまいたかったが寮長の場所は元から寮の住人に聞くつもりだったので、じゃあつてことで柴又は連れて行って貰うことにした。



## 出会い篇 1（後書き）

かなり書きづくて、なんか前作とちよつと違う子達になったかもです。出来れば、次くらいで終わりたいなあと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2098d/>

---

敢えて言うなら……

2011年1月13日14時32分発行